

氏 名	イ 李	ジョン 政	ウン 垠
学位の種類	博 士 (文化財)		
学位記番号	博 美 第 343 号		
学位授与年月日	平成23年3月25日		
学位論文等題目	〈作品〉 1. 唐散楽 渾脱の半臂、2. 夾纈羅幡 (正倉院南倉185第129号 櫃 第84号)、3. 夾纈羅幡 (正倉院南倉185第129号櫃 第118号) 〈論文〉 正倉院夾纈技法の復元的研究－纈縹染表現技法の解明－		
論文等審査委員			
(主査)	東京芸術大学	教 授	(美術学部) 菅野 健一
(論文第1副査)	〃	〃	( 〃 ) 稲葉 政満
(作品第1副査)	〃	准教授	( 〃 ) 辻 賢三
(副査)	日本女子大学	教 授	小笠原 小枝
( 〃 )	東京芸術大学	〃	( 〃 ) 山下 了是

(論文内容の要旨)

正倉院に現存する夾纈染を詳細に検討した結果、その制作方法には従来から言われている一對の版木を用いて制作する方法と、もう一つ複数の版木を用い版木を挟み替えながら制作する方法があったことが想定された。特に夾纈による纈縹染の表現は一對の型では不可能である。本研究では、このような夾纈染の制作方法について、実際の実験制作を通してその方法を実証し、さらに原寸大で復元制作を行い、版木の挟み替えによる夾纈制作技法を解明することを目的とした。

夾纈とは、文様を凹に彫った一對の版木の間に数回折り畳んだ生地を挟み、固く締め付け、予め版木の文様の凹部から裏面に至るまで貫いた孔から染料液を注入し、注入された染料液によって多色あるいは単色に染め上げる染色技法である。一方、版木の凸部は文様の輪郭に相当し、版木の圧迫により生地は防染され、生地本来の色である白色のまま輪郭線として残るのが特徴である。

夾纈は奈良時代に盛んに用いられた防染模様染の一種で、東大寺大仏開眼会(752)の儀式に使用された幡や舞楽装束、聖武天皇の七七忌(756)に毘盧舎那仏に献納された屏風、聖武天皇一周忌(757)法要に使用された羅道場幡や錦道場幡などに使用され、同類の防染模様染の中では、最も現存作例が多く残片を合わせて約700件を超える遺品が正倉院に伝わっている。

しかし、当時の制作方法を推測できる文献資料や版木などの具体的な染め道具類については不明な点が多い。そのため正倉院の染織品が一般公開された大正14年(1925)以来、色鮮やかで多彩な夾纈を制作する方法は、「幻の染」と呼ばれるほど謎に包まれていた。

幸い1972年、インドのアーメダバードから染色に使用された版木の実例が報告され、その形態から、一對の版木で多色染を施すことが技法的に可能であることが判明した。

以来日本国内では、再び夾纈制作方法に対する関心が高まり、1970年代前半から1990年代前半にかけて数回、復元制作が行われ、一對の版木を用いた多彩な夾纈染制作の方法が明らかにされてきた。

しかし、数ある正倉院の夾纈染遺品のうち、復元されたのは3～4点と限られた作品に関するものであった。筆者は、正倉院に伝来する夾纈染技法を解明するためには、多くの夾纈染遺品の制作方法を検討する必要があると考えた。そのため、まず従来の制作方法である一對の版木を用い多色染を施す方法について実験を試みた。しかし、版木の制作工程から染色工程までの全工程が詳細に記録された報告は少なく、実際は実験過程で生じた失敗を繰り返しながら徐々にやり方を改善し、その結果と先学の研究

報告との比較を通して、一対の版木で多色の夾纈染を制作することができた。

染色技術を習得した後、再び正倉院の夾纈染を検討してみると、一対の版木では説明できない夾纈染が存在することに気づいた。それは、同一裂の中で文様がズレていると思われる箇所や色の境目に防染された痕跡が見当たらないもの、また、防染され表れる輪郭の幅がところどころ不均一に染め上がっているものであった。

上述した夾纈染は今までの先行研究では復元された例は無く、筆者は、なぜそのように染め上がるのかという疑問を持ち、その原因を解明する必要があると考えた。そこで、類似する夾纈染を集め考察した結果、いくつかの夾纈染から文様がズレている痕跡が確認できた。これらは複数の版木を用い、版木を挟み替えながら制作していたことを示唆する作例と考えられた。

そうした作例を基に、実際、版木を挟み替えながら制作する方法は可能か、また、版木を挟み替えることで、同様の夾纈染を染色することができるかどうかを検証するため、以下の通り実験を行った。

まず、纏纈染の濃淡で染められている夾纈染について、文様や濃淡の部分がお互いにズレていることがわかった。そのことから色の濃淡別に版木を制作し、版木を挟み替えながら染色を行った。その結果、正倉院の夾纈染と類似する濃淡表現が染め分けられ、版木を挟み替えることで、纏纈染の濃淡の表現が可能であることが明らかになった。

次は、防染された輪郭線が不均一に染め上がった夾纈染は、地の部分である青色と接する輪郭線の幅が部分的に不均一に染め上がっていることが確認できた。

そこで、地の部分と文様を別々に制作し、版木を挟み替えながら染色を行った。結果、版木を挟み替える際、微妙なズレが生じ、輪郭線の幅が不均一に染まることが分かった。それは滲みやただの偶然ではなく版木を挟み替えたため、輪郭線の幅が不均一に染め上がることが分かった。類似する夾纈染が正倉院にいくつか現存しており、それらも含め考察してみると、特に、青色と接している輪郭線が不均一に染め上がっていることが多かった。青色の染料である藍は1回では鮮やかな青色に染まりにくく、また、空気中の酸素により酸化しやすいため、浸染方法により重ね染めを行う必要がある。そこで、濃い青色を染めるためには、敢えて青色用の版木を制作し、版木を挟み替えて制作していたと推測できる。

実験結果を基に実験と同様の方法で、原寸大での復元を試みた。その結果、正倉院の夾纈染と類似する夾纈染を染め上げることができた。

以上、本論を通して正倉院に伝世する夾纈染の制作方法には、従来試みられてきた一対の型板による技法だけではなく、複数の型板による制作方法が存在したこと、特に纏纈染の表現にはこの方法が不可欠であることを明らかにすることができた。

#### (博士論文審査結果の要旨)

正倉院には夾纈作品が700点以上残っているが、その制作技法は不明であった。1972年にインドで夾纈技法に用いられた版木が発見され、これを契機に夾纈技法の再現研究が数人の研究者によって行われ、数点が復元されている。

第1章で、申請者は既存の成果と復元されていない他の多くの夾纈作品を丹念に調査して、同一裂の中で①文様がずれているもの、②色の境目に防染された痕跡が見当たらないもの、③防染されたときに現れる輪郭の幅が部分的に不均一に染め上がっているものを見いだしている。

第2章では、これらの問題を解決する方法として、一対の版木のみでなく、複数の版木対を用いることで、これらの現象を再現出来ることを実験的に初めて明らかにしており、その成果は高く評価できる。

申請者はインドで発見された版木の形を手始めに、過去に行われた復元研究を参考にして、夾纈技法の再現研究をどのようにして完成させたかを詳細に述べている。具体的事項としては、版木に使用する木材の選定、版の彫り込み深さおよび版木の厚さ、版木を締め付けるための木材の形状と方法、染めに

用いる絹地の条件と版木への挟み込み方法、染色時の染料の注入方法などについて検討している。そして各検討事項に関して、その良否を写真および図解を含めて、詳細に記述しており、実際に夾纈技法を実験しているかの印象を与える内容としてまとめている。今後、夾纈技法を実施する際になくてはならない技法書としても利用されると期待できる。

第3章では前章までの成果をもとに正倉院の夾纈作品である「唐散楽 渾脱半臂」および「夾纈羅幡」の実物大での復元制作を行った内容について述べている。

以上、夾纈技法について複数の版木を用いて挟み換えにより行ったことを実証するなど大きな成果をあげており、その研究過程を丁寧にとまとめている。よって、博士（文化財）の学位を授与するのに十分な内容の論文である。

#### （作品審査結果の要旨）

本研究は正倉院に残る染色品の内の夾纈技法についてであるが、遺品としては実在するものの、染色に使用された道具類や技法に関する記録、あるいは文献等一切残っていない。これまで先学による研究は数件あったが、十分な結果が得られたとは言い難い。申請者は先学の研究結果を参考にしながら、それらに内包する問題点を精査し、尚かつこれまで見過ごされていた染色箇所新たに気づき、その表現がどのような技法によるものかを見事に解明して、極めて高い完成度の復元に至ることができた。

研究初期の段階では、正倉院宝物の「白地花鳥文夾纈緇」、「茶地鹿花卉丸文夾纈羅」、「紫地唐花文夾纈羅」を対象に実験を行った。自らそれぞれの図について厳選材を用いて一对の版木に彫り起こし、材料の捻れや不均一な締め付けによる染料の滲みを克服しつつ、各々の版木により確実な染色結果が得られるよう、何度も実験を繰り返し行った。同時に植物染料による色相検証も進め、問題点を一つずつ解決して回を重ねる毎に良好な結果を得ることができた。よって遺品に限りなく近づけることができた。

以上の基礎実験を確実に行ったことにより、これまで見過ごされていた ①文様のズレ ②色の境目に防染の白線のないもの ③防染の白線の不均一なもの、といった本研究のテーマに取り掛かることができた。これらは「一对の版木で染色後、別の一对の版木で挟み替えて更に染色を加えた」という仮説を立てての実験である。実際、布帛の挟み替え時の取り扱いや染料の媒染による発色時間の管理を含めた難問が付随したが、申請者は忍耐強く解決した。

よって、版木の挟み替えによる纏纈染表現技法も解明でき、それによる制作品も正確に復元ができ、十分に見応えのあるものとなり、博士の学位授与に値するものである。

#### （総合審査結果の要旨）

本研究は正倉院に残る三纈と呼ばれる染色品の内の一つである夾纈、即ち板締め防染による染色技法の解明である。遺品として現存するものの、技法等に関する資料や文献は発見されていない。これまでも先行する研究は数例あったものの、十分に解明されたとは言い難い。申請者は先学による研究結果を一例ずつ丁寧に検証しながら遺品に照らし合わせ、先行のそれら復元品が遺品に合致しない基因について精査検討し復元に当たった。復元実験では版木の材質を換えながら木質の持つ特性を探り、結果ヤマザクラを使用することで良好な防染状態が得られた。また一对の版木による布帛の圧着についても、均一な状態を保持するための実験が幾度となく繰り返されている。染色工程においては遺品に則して染料及び媒染剤を選定し、合致した色相再現結果が得られるよう工夫がなされた。1. と2. の夾纈羅幡に使用されている布帛については、蚕そのものが当時のものどちがい、遺品と同質の羅が今日織ることができないため、やむなく平絹を使用した。夾纈技法による染色復元としてはまったく問題ないが、今後同質の羅が復現されることがあれば、本研究も完璧なものになる。

以上の各々の工程毎、細部にわたっての工夫による実験結果として、これまで気付かれ無かった、防染による輪郭線の不均一やその輪郭線すらみられないものが技法にあったことを解明し、あるいは縷縷彩の表現技法の解明にも至ることができた。このことは、インドのアーメダバードで染色用の版木が発見されるまで“幻の染”と言われていた夾纈の謎が解けたように、夾纈染研究の新たな進展とみることができる。しかも高い再現性が得られたことも含め、全ての点において格段の評価が出来る。

これらの高結果に至らしめた要因は、取りも直さず申請者に内在する高い想像力によりこれまで気付かれずにあったものに着眼し、如何なる方法によりその現象が表現されているかを解明できたことによると確信するところである。

以上の成果をふまえ、論文審査及び作品審査により博士の学位授与に十分値するものと判断する。